様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月１５日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：２００９～２０１０
課題番号：21820026
研究課題名（和文）イントネーションの音韻構造の解明に基づく
『イントネーションの類型論』の構築
研究課題名（英文）　The construction of an “intonational typology” on the basis of the investigation of the phonological structures of intonation
研究代表者
五十嵐　陽介（IGARASHI YOSUKE）
広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：00549008

研究成果の概要（和文）：

韻律句形成過程の差異に基づいて諸言語を二分する、イントネーションの音韻構造の類型論を提案した。これまでの類型論は、対象とする言語がストレスを有する言語に限定されていた。本研究が提案する類型論では、ストレスの有無に関わらず、トーンイベントの分布の差異に基づいて言語を二分する。ひとつめの類型は「イベントがほとんど全ての語に付与される言語」（密）であり、もうひとつの類型は「イベントが全ての語には付与されない言語」（疎）である。

研究成果の概要（英文）：

A typology of the phonological structures of intonation was proposed, in which languages are dichotomized on the basis of the differences in prosodic phrasing. Previous researchers have developed similar typologies solely based on data from languages with stress. The typology proposed in my study classifies languages, both with and without stress, into 1) the ones in which tonal events are found on almost every word in the utterance (“Dense”) and 2) tonal events are found on only some of the words (“Sparse”).

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,080,000	324,000	1,404,000
2010 年度	970,000	291,000	1,261,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,050,000	615,000	2,665,000

研究分野：音声学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：イントネーション　類型論　日本語所方言　韻律　音韻論　音声学
prosody-syntax interface　intonational phonology

１．研究開始当初の背景

音声言語には、発話を構成する複数の語が、何らかの韻律的特徴によって、さらに大きな単位にまとめ上げられる働きが観察される。この韻律的なまとまりを持った単位が韻律句(prosodic phrase)と呼ばれるものであるが、韻律句をかたちづくる韻律的特徴、韻律句の階層的構造には言語差が観察されることが知られている。韻律句形成の類型論を構築する試みはこれまでもあったが、その議論はストレスを有する諸言語に限定されていた。ご

く最近になって、ストレスを持たない諸言語の知見が蓄積されるようになったが、ストレスの有無に依存しない類型論の構築は、現在も残された課題となっている。

２．研究の目的

本研究の目的はイントネーションの音韻構造の類型論を構築することにある。具体的には、実験音韻論的手法に立脚して、諸言語のイントネーションの音韻構造を比較し、その構造の通言語的差異および、言語を超えて観察される共通性を明らかにし、ストレスの有無に依存しない韻律句形成の類型論を構築することを目的とする。

３．研究の方法

実験音韻論的手法を用いる。実験音韻論的手法とは、録音された音声信号の音響音声学的分析（産出実験）や、音声刺激に対する話者の反応などの分析（知覚実験）に基づいて、ある言語の音韻構造を明らかにするという手法である。対象とする言語は、日本語の諸方言を含め、韻律構造が異なる諸言語とする。

韻律句形成の研究に有効なテスト文がどのようなものかは、国内外の先行研究や研究代表者のこれまでの研究でかなり明らかになっているので（例えば修飾構造やフォーカス構造の差異を含んだテスト文）、そのような文を実験に用いる。

４．研究成果

(1) 中国語の声調の文中での変異

声調言語である中国語における声調の文中における変異に関する研究を共同研究者とともに行った。平成 21 年度の研究では、「第二声」「第三声」と呼ばれる声調の文中における実現形が、従来知られていた形とは異なりうることを明らかにした。さらに平成 22 年度の研究では、それらの声調に加えて「第一声」と呼ばれる声調も、特異な実現を示しうることを明らかにした。さらにこの特異な声調の実現形を生じさせる条件の一部を明らかにした。文中の声調変異に関する本研究は、声調言語のイントネーション研究に重要な示唆を与えるものである。

(2) 日本語東京方言と近畿方言の韻律統語写像規則の対照研究

東京方言と近畿方言の韻律統語写像規則を比較する実験的研究を行った。先行研究では、両方言の間に特定の韻律統語写像規則に差があるとする見解と差はないとする見解が対立していたが、本研究の結果は、方言差は見られないとする見解を支持するものとなった。

(3) 琉球語宮古池間方言の韻律構造

2 種類の語彙的音調を区別する体系を有すると従来考えられてきた琉球語宮古池間方言が、3 種類の語彙的音調を区別する体系であることを、共同研究者とともに初めて明らかにした。また、この 3 種類の音調の区別が観察できる音韻的条件は非常に限られている。その条件の全てはまだ分かっていないが、少なくとも、当該の語と述語を含む 3 つ以上の語の連続において、3 種類の音調の区別が観察できることが分かっている。語彙的音調の実現に 3 つ以上の語の連鎖を必要とする言語は、管見の及ぶ限り知られていない。この方言は、声調言語的特徴とストレス言語的特徴を兼ね備えた方言であることがすでに知られているが、今回の研究は語彙的音調およびイントネーションの類型論を構築する上で重要な示唆を与える。

(4) 世界の諸言語における韻律句形成の類型論の提案

研究代表者が従来提案していた日本語諸方言の韻律句形成の類型論を一部改定し、その適用範囲を世界の諸言語にまで広げた類型論を提案した。対象とした言語は、英語、オランダ語、ブラジルポルトガル語、フランス語、韓国語ソウル方言、バスク語、日本語東京方言、スペイン語、アラビア語エジプト方言、日本語近畿方言などである。

先行研究では、英語、オランダ語、ブラジルポルトガル語、スペイン語、アラビア語エジプト方言などを記述する枠組みと、フランス語、韓国語ソウル方言、バスク語、日本語東京方言、日本語近畿方言などを記述する枠組みが大きく異なっていた。前者は「ピッチアクセント」という単位に基礎を置いて記述する枠組みであり、後者は「アクセント句」という単位に基礎を置いて記述する枠組みである。先行研究において観察される枠組みの差異が何に起因するものなのかは明らかではない。前者の枠組みはストレスを持つ（とされる）言語に適用され、後者はストレスを持たない（とされる）言語に適用されるという傾向はあるが、必ずそうであるわけではなさそうである。（フランス語は一般的にストレスを持つ言語とみなされているが、アクセント句ベースの記述が行われてきた。）

韻律構造の類型論的分類として先行研究では、「ピッチアクセントが基本的に全ての語に付与される言語」（スペイン語、アラビア語エジプト方言）と「ピッチアクセントが全ての語には付与されない言語」（英語、オランダ語、ブラジルポルトガル語）という二分法が提案されていた。この分類はしかしな

がら、ピッチアクセントに基礎を置いて韻律構造を記述できない言語には適用不可能であるという問題がある。一方、研究代表者が従来提案していた日本語諸方言の韻律句形成の類型論では、諸方言を「アクセント句が基本的にひとつの語から構成される方言」と「アクセント句が二つ以上の語から構成されうる方言」とに分類する二分法が提案されていた。当然ながらこの二分法は、アクセント句に基礎を置いて韻律構造を記述できない言語には適用不可能である。

そこで本研究では、両者を融合し、ストレスの有無、あるいは記述的枠組みの差異を超えて、韻律構造を二分できる類型論を提案した。この類型論では、音調の「密度(density)」に基づいて言語を二分する。ひとつめの類型は「密（Dense)」と呼ばれ、「トーンイベントが基本的に全ての語に付与される言語」である。もうひとつの類型は「疎（Sparse)」と呼ばれ、「トーンイベントが全ての語には付与されない言語」である。Dense 言語にはスペイン語、アラビア語エジプト方言、日本語近畿方言が含まれ、Sparse 言語には英語、オランダ語、ブラジルポルトガル語、フランス語、韓国語ソウル方言、バスク語、日本語東京方言が含まれる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 10 件）

1. 五十嵐陽介、田窪行則、林由華、久保智之(2011) "Ikema Ryukyuan has three, not two, lexical tones, 17th Workshop on East Asian Languages (WEAL 2011), 平成 23 年 3 月 18 日, UCLA, Los Angeles, CA, USA.
2. 五十嵐陽介(2010) "Typology of prosodic phrasing in Japanese dialects from a cross-linguistic perspective", ISAT 2010, 平成 22 年 12 月 19 日, 東京:国立国語研究所.
3. 五十嵐陽介(2010)「日本語諸方言の韻律句形成過程を類型化する」日本語学会 2010 年度秋季大会シンポジウム「イントネーション研究の現在」,『日本語学会 2010 年度秋季大会予稿集』, 3-8, 平成 22 年 10 月 23 日, 愛知：愛知大学豊橋キャンパス.
4. 五十嵐陽介(2010)「統語論における枝分かれ構造は韻律にどのように反映されるのか？―近畿方言と東京方言の場合―」,『第 24 回日本音声学会全国大会予稿集』, 185-190, 第 24 回日本音声学会全国大会, 平成 22 年 10 月 10 日, 東京：国学院大学.
5. 武内真弓、五十嵐陽介(2010)「中国語普通話の軽声にみられる特異な声調実現:人称代名詞,および軽声が連続する場合」,『第 24 回日本音声学会全国大会予稿集』, 19-24, 第 24 回日本音声学会全国大会, 平成 22 年 10 月 10 日, 東京：国学院大学.
6. 酒井弘、五十嵐陽介、チュウ・ロザリン、田淵美有(2010)「話し言葉の理解における韻律情報処理のタイムコースー視覚世界パラダイムを使用した視線計測による検討ー」,『聴覚研究会資料』, 40(6), 541-544,日本音響学会聴覚研究会(H), 平成 22 年 7 月 18 日, 広島：県立広島大学三原キャンパス.
7. 五十嵐陽介(2010)「近畿方言における統語構造と韻律構造の関係はどうなっているのか」日本音声学会第 321 回研究例会, 平成 22 年 6 月 26 日, 東京：国立国語研究所.
8. Hayashi, Yuka, Yukinori Takubo, Yosuke Igarashi, Thomas Pellard, and Tomoyuki Kubo (2009) "The word prosody of Ikema Ryukyuan", Workshop on Ryukyuan Languages and Linguistic Research. 平成 21 年 10 月 25 日, UCLA, Los Angeles, CA, USA.
9. 武内真弓・五十嵐陽介 (2009)「中国語普通話における shenme と zenme の声調の特異性：音響分析と音韻論的解釈」,『第 22 回日本音声学会全国大会予稿集』, 75-80, 第 23 回日本音声学会全国大会, 平成 21 年 9 月 27 日, 福岡:九州大学.
10. Hayashi, Yuka, Thomas Pellard, Yukinori Takubo, Tomoyuki Kubo, and Yosuke Igarashi (2009) "The tone system of Ikema Ryukyuan", International Workshop on The History & Reconstruction of Japanese Accent, 平成 21 年 9 月 4 日, INALCO-CRLAO, Paris, France.

〔その他〕
ホームページ等
http://www009.upp.so-net.ne.jp/y_igarashi/home.html

６．研究組織
(1)研究代表者

五十嵐　陽介(IGARASGU YOSUKE)
広島大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：00549008

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：